音読テキスト「日本の名文」16

「猫町」

萩原朔太郎

参考①青空文庫
②ウィキペディア
③参照：「猫町」長崎出版

「町には何の変化もなかった。往来は相変らず雑閙して、静かに音もなく、典雅な人々が歩いていた。どこかで遠く、胡弓をこするような低い音が、悲しく連続して聴えていた。それは大地震の来る一瞬前に、平常と少しも変らない町の様子を、どこかで一人が、不思議に怪しみながら見ているような、おそろしい不安を内容した予感であった。今、ちょっとしたはずみで一人が倒れる。そして構成された調和が破れ、町全体が混乱の中に陥入ってしまう。

私は悪夢の中で夢を意識し、目ざめようとして努力しながら、必死に蹠いている人のように、おそろしい予感の中で焦燥した。空は透明に青く澄んで、充電した空気の密度は、いよいよ刻々に嵩まって来た。建物は不安に歪んで、病気のように瘠せ細って来た。所々に塔のような物が見え出して来た。（略）

「今だ！」と恐怖に胸を動悸しながら、思わず私が叫んだ時、或る小さな、黒い、鼠のような動物が、街の真中を走って行った。私の眼には、それが実によくはっきりと映像された。何かしら、そこには或る異常な、唐突な、全体の調和を破るような印象が感じられた。

瞬間。万象が急に静止し、底の知れない沈黙が横たわった。何事かわからなかった。だが次の瞬間には、何人にも想像されない、世にも奇怪な、恐ろしい異変事が現象した。見れば町の街路に充満して、猫の大集団がうようよと歩いているのだ。猫、猫、猫、猫、猫、猫、猫、猫。どこを見ても猫ばかりだ。そして家々の窓口からは、髭の生えた猫の顔が、額縁の中の絵のようにして、大きく浮き出して現れていた。

戦慄から、私は殆んど息が止まり、正に昏倒するところであった。これは人間の住む世界でなくて、猫ばかり住んでる町ではないのか。一体どうしたと言うのだろう。こんな現象が信じられるものか。たしかに今、私の頭脳はどうかしている。自分は幻影を見ているのだ。さもなければ狂気したのだ。私自身の宇宙が、意識のバランスを失って崩壊したのだ。

作者とおぼしき「私」が、いつもよくいく町に着いたはずなのに、ヨーロッパの古都市のようにきらびやかな、見覚えのない場所にいることに気がつく。好奇心に駆られながらも不安な眼で見ていると、猫が、通りという通り、建物という建物からあふれ出し、町中を埋め尽くす。

もちろんそれらはただの幻想にすぎず、次の瞬間、町は普段のありふれた、見飽きた風景に戻っている。いつもとは別の入り口から入ったため、見慣れた建物や風景が、全く別ものに感じられるのは、よくあることだ。

しかし、作者は、人間の心に潜むこうした一瞬の時空の破れとでもいうべきものを見事に捉えて、世界の真相を覗き込むような幻想譚を作り上げている。

朔太郎は、自らの内面を表現する詩人として出発するが、後年「日本主義」を標榜するに至った。

猫と言えば、今では「かわいい」の代名詞となり、また犬の数を超えて、愛されるペットの代表的存在となっている。

しかし、同時に、古来より洋の東西を問わず、謎めいた存在として描かれてきたことも事実である。ポオの「黒猫」や日本の「化け猫」「猫又」の話、ヨーロッパでの、魔女の化身としての黒猫など挙げればきりがない。これは、猫の生態が、個別を好み、気まぐれで自己中心的な行動に見えるところから、想像されたのだろう。朔太郎のこの作品も、一種魔的な想像の産物と言える。

萩原朔太郎（はぎわらさくたろう）明治十九年～昭和十七年。大正・昭和に活躍した詩人。日本の口語自由詩の確立に貢献した。

引用は「猫町～散文詩風な小説（ロマン）」から。